



原色版印刷の半世紀 『原色版印刷の 思い出(上)』

このたび、はからずも東京写真製版工業組合の推薦で黄綬褒章を受章することが出来ました。その間、製版組合を始め関係各位のみなさんのご助力にこの席を借りてお礼申し上げます。

史談会開催日

昭和57年(1982年)2月19日

■ 語る人

高野 英雄 氏

(半七写真印刷工業 相談役)

■ 【高野英雄氏プロフィール】・

・印刷図書館主催の印刷史談会がこのほど開かれ、半世紀以上にわたって原色版印刷に携ってきた高野英雄氏がその変遷と思い出を語った。高野氏は昨秋、原色版印刷の功労者として黄綬褒章を受章し現在、半七写真印刷工業 相談役。

史談会では、高野氏の恩師で原色版技術の先駆者である田中松太郎氏の人物となりや、原色版印刷の黎明期のころの話を中心に語った。また、高野氏の話のあとも、出席者の質問に答え、黄綬褒章受章の対象となった金色版印刷の発見から「六大寺大観」の製作過程等を語った。

聴講者からの質問や、原色版に関する思い出話が相次ぎ、あっという間の2時間であった。本紙では、この史談会を2回にわたって掲載する。

実は、これを機会に先日、印刷図書館の沢田館長が会社に来られ私の永い原色版生活の歴史とその成り立ちについて、史談会で話してほしいとの申し出がありました。その際、私は何となく了解の返事をしたわけですが、何分にも浅学非才の私がこのような席でみなさんの期待に応えるような話を出来るかどうか、沢田館長が帰られたあとで後悔した様な訳でしたが、しかし、お引き受けした以上、出来るだけ私の体験を中心にお話してみよう、と「当たって砕けろ」の心境でやってきました。

これから原色版の話をする前に私の恩師である田中松太郎先生のごことに少し触れたいと思います。田中先生については、灯台下暗しと言いますか、存命中に改めて経歴を聞くことはありませんでした。今になって、お聞きしておけばよかったと思っているわけですが、いずれにしてもヨーロッパから帰られた後の経緯はあまり詳しくは知りません。

とにかく、田中先生がヨーロッパに渡られた時のことは『製版組合工業史』に出ております通り、富山県出身で明治15年に上京し、師事した日下部鳴鶴先生の実家田中家を継いだということです。その養父が写真業者だったことから、写真術を学んだ。で、明治30年頃牧野駐伊公使の赴任に際し、渡欧した。そして34年にウィーンの写真製版学校に入り、エーダー博士について3色版の実技を研修し、37年に帰国後数社に勤務、その技術を後進に伝えました。田中先生は帰国してから東洋印刷に勤務されたと聞いています。その東洋印刷は現在ある東洋印刷とは違うようです。その後大正4年に神田錦町に田中半七写真製版所を創立しました。

ヨーロッパに渡るおり、たまたま絵の勉強に同行した画家連中が大勢いたらしく、浅井忠、和田英作、石井伯停等々といった明治画壇のそうそうたるメンバーだった。ここにブリヂストン美術館の阿部信男氏が書かれている『浅井忠の性格についての一考察』という小論の1節にパリ在住当時、浅井忠氏が書いた文章があります。浅井忠氏は非常にユーモアに富んだ人らしく、ここでその戯文的に書かれたその文章を紹介致します。

「半七、八半、もくすけの三狂人、パリの都に流寓してけり、半七は写真屋を業として、ロハ写しの客多し……」と、このような文面で書かれています。このもくすけという人はどういう人かわかりませんが、“看板書きにして貰われ物多し”と悪口が書いてあります。それで「八半はパン焼たらんとして果たさず、終わりに石版屋の職人に住込みて月謝を払う身分となり、かくして三人居食することここに一年有余、糧つき計きわまりて籠城おぼつかならんとするに際し、半七、故郷より召し出されて、ウィーンの看板屋に住み込むべき仰を受けたり、また、八半も首尾よく卒業して近いうちにボロ着て故郷に帰る身となれり、他は哀れむべきは柰助なり、罪障いまだ不尽、来る年までは動きもやらぬ身にしありけり、半七まずローマの古巣に帰りて、やや、ウィーンに旅立ちすることとなれり、貧交の楽しみもいまやここに終わらんとするはいと、惜しけれど、また目出たき門出にもありければ、三人、ポンム・ド・テールを食うて舌鼓を打ち、かくなん、貧交への贈物、もくすけくん、君をフレーズ食うて送りけり——こんなような文章があり、田中松太郎先生の渡欧時代の片鱗を知るといった程度の知識しかありません。

大体そんな苦勞をして、ウィーンで過ごし、最終的には原色版の勉強を終えて日本に帰ってこられました。そして、神田の鍋町で開業したわけです。

そんな経緯から、私が半七印刷所に入社した当時、3色版ですが原稿のほとんどは油絵とか水彩画とか、洋画が多かったことを記憶しています。これはやはり、渡欧中の画家との交流の関係からでしょうが、そうしたものが圧倒的に多かったわけです。また、私が入社した当時、指導して下さった先輩たちは立派な人たちが多くいました。この際とくに申し上げておきますが、当時すでに田中先生の技術指導を受けられ、写真製版界に独立して活躍された方々には、西鳥羽さん、小堀さん、斉藤さんといった人たちがいます。

ここで、当時の原色版のやり方と言いますか、その頃の話をして

みたいと思います。古い方はご承知だと思いますが、まず、油絵にしても水彩画にしても、当時、イーストマンとかイルフォードの乾版を使って分解していました。その時のフィルターは、かなり厚いガラスを使い、そして3色分解されたポジを透過でもって網撮りするわけです。その網撮りは湿版でやっていました。この湿版の網撮りは点の入れ方によって、分解が良くいっていても網撮りのかけ方によっては良くも悪くもなります。当時、湿版の網撮りで絞りは銅板を切り抜いて、マルにしたり、糸巻き状のものにして使っていました。

網点の入れ方ですが、当時はダンゴテンと言いましたが、中間からハイライト、シャドウにかけての点の入れ方が、なるべく糸巻き状の点に入るのが良いとされていました。それが、マルいような点になると全体の階調のシャープさが減殺されてしまう、というわけです。

ご承知のように当時、スクリーンはガラス・スクリーンで、今はコンタクトでやりますが、湿版だとコンタクトするわけにはいかず、スクリーン距離というのが必要です。そのスクリーン距離を正確に設定することが、一つのポイントでありました。網点の撮り具合は、そのスクリーン距離、絞りなどに大きく左右されました。もちろん、当時は3色版の時代で墨版は一切使っていませんでした。

私が半七印刷所に入社した頃、会社には上野美術学校を出た石橋（光風会々員後に日展の会友）さんという人がいて、校正が刷り上がると直しなどを指示していました。今考えてみますと、私などは色を見る目をその石橋さんに教わり、かつ影響されたと言えます。例えば、オリジナルの絵の最も大事な調子の見方などについて勉強したわけです。

そうしたことから、当時は画家の方々の信頼を得、油絵や水彩画などを多くやりました。私はその当時の画集を保存して持っていたのですが、残念ながら戦災で焼けてしまいました。

